

古代の筑後川流域

古代の筑後川流域と書いた資料がありますけども、これを使って説明していきたいと思います。筑後川の流域史ということですけども、歴史は古く、私の立場から古代に焦点を絞って話していきたいと思います。狩猟漁労と採集生活は時代で言いますと旧石器時代から縄文時代になる。それから始まって奈良時代までといいますと1万年以上の歴史になるわけです。

1. 狩猟漁労と採集生活—旧石器・縄文時代

筑後川流域の歴史は旧石器時代に遡るといことです。戦後、日本の歴史が新しく書き換えられていく。それ以前は「古事記」「日本書記」に基づく日本の歴史だった。それももちろん参考にはなりますけども、地下から発掘される遺跡、そこからの出土品、そうした物質資料によって歴史を組み立てていくというのが戦後の歴史研究の大きな転換となった。

それでこの筑後川流域でも1万年以上前の旧石器が発見されております。これは縄文時代の石器とは違って、専門家の間でも石器という人もいれば、単なる石ころという人に分かれるほど。今のところ日本では、5万年ほど前まで遡る。隣の中国大陸や朝鮮半島では10万年前とか、30年前とか古い旧石器が見つかっていますので、日本だって、当然ありうる話です。そう言う意味では、旧石器の専門家は黙々と古い何十年万年前の旧石器文化を探究し続けている。

確実に2万年前から3万年前に、日本列島に人は住み始めたと言われている。筑後川流域におきましても、久留米あたりでは1万年ぐらい前の遺跡が見つかっていますので、おそらく流域一体にその痕跡があるのではないかと思います。

その時代の特徴は採取経済というか、自然経済というか。自然にある食料資材を捕獲して、あるいは採取して、そして生活の糧にすることです。川や野で狩をしたり、魚を採ったり、木の実を拾って食糧にするとか、自然にある生活の糧をもとに、暮らすという、それが旧石器時代の大きな特徴です。

1万2、3千年前に日本列島に石器だけではなく、器・土器もあったことがわかってきた。それを日本では縄目の文様があったことから縄文土器、筑後川流域の各地でみつかりますけども、縄目文様だけではなくて、文様のないものもあれば、刻んだ物ものもあれば、多様です。最初に注目された土器に縄目文様があったので、縄文土器と名付けられたわけです。

旧石器時代と縄文時代の共通点は、狩猟と漁労と採取。いわゆる自然にある食用資源を採取する。これが縄文期の大きな特徴です。当時は、人々は自然の一員として、自然に寄り添う、自然に溶け込んで生活するというのが特徴です。

自然資源に頼っていますから、半径5キロぐらいのところの行動範囲で、動物や魚や貝、あ

るいは木の実なんかを採取して、そういう生活の1つのテリトリーがありますけどね。これが大きな特質で、自然に依存していますので、食糧が減っていくと移動するということがあって、縄文時代の特質は移動するということ、定住ではないということです。

ところがこれも、調査が進むと書き換えられるようになりまして、鹿児島県の霧島の南の方に上野原という遺跡が見つかって、縄文時代の古い集落ですけれども。そこでは、竪穴式住居を構えて、定住していることがわかってきた。縄文時代の早く、一万年前から定住していることがわかってきました。この筑後川流域でも、久留米で古い遺跡 **野口遺跡** というところで、古い定住している集落の跡が見つかっています。日本列島各地と同様に、この筑後川流域でも一万年以上前の旧石器だけの時代、土器を発明したということは煮炊きができますし、食物を蓄えることもできますし、そういう意味で器の発明、土器の発明は、非常に大きなことですが、縄文時代が筑後川流域で、展開していったということです。



図1 平塚川添遺跡周辺遺跡分布図
(平塚川添遺跡を愛するみんなの会、1995『水に浮かぶムラのはなし』より)

2.農耕社会の成立と発展

そういう歴史に大きな変革期が起こります。それが「農耕社会の成立と発展」、弥生時代です。それまで知られていた、大正のはじめですけども、縄文土器とは全く違った、土器の表面に文様が全くない。それを弥生式土器と名付けたわけです。その時代を弥生時代と設定した。この時代の特色は、縄文時代の採集経済から生産経済に移ったというのが特徴です。この時代になって農業を始めたということです。社会の仕組みも変わってくるというのが特徴です、「農耕社会の成立と発展」という、新しい時代が訪れます。

縄文時代は、どういう時代かという、定住するにしろ、血縁的な繋がり、集団で生活していて集落を営んでいた。独立していた。農業が始まると、それだけでは成り立っていかなくなった。農耕社会の成立としましたけども、村々が集まって、地域がまとまるという時代へと移っていく。それは専門用語では農業共同体と言いますが、要するに農業経営をする上で村々が集まって、一つの共同体を作る。農業を基軸とした集団が作られ、より多くの集団が形成される。農業共同体を運営していくためには、リーダーがいる。リーダーが誕生するわけですね。首長が登場する。

平塚川添遺跡、現在の朝倉市です。甘木インターチェンジがありますけども、その周辺が再開発されるわけですけども。そういう大規模開発計画があると試掘する。至る所に、時代的にはほとんど弥生時代ですけども、大変な遺跡が眠っている事がわかりました。そんな大事なものをなら保存した方が良く保存運動が起こり、当時の市長さんの英断でこれが保存されることになりました。

平塚川添遺跡は、集落を三重の堀でめぐらした、大規模な集落が出てきたわけです。

時代的には弥生時代の終わりの頃ということで、まさに邪馬台国時代になるわけです。そういう時代の大規模集落が出てきました。

右上の隣接地に「平塚山の上遺跡」がありますけれども、これは平塚川添遺跡に続く、弥生時代の終わりから古墳時代にかけての集落です。平塚川添から集落がどういう理由か分かりませんが少し北東の隣接地に移ったと理解します。

平塚川添遺跡の図面だけでは分かりにくいと思ひまして、平塚川添遺跡想像復元図を書いていますけれども、こういう景観の大規模な集落があったのではないかと想像復元図を書いています。三重の堀があって、真ん中に広場のようところがあってそこに4棟の掘立柱建物って言ひまして、地下に柱を直接埋め込んで、その上に床の高いそういう建物を建てているわけです。発掘された時には4棟出てきましたが、屋根が重なるほど接していますから、同時に4棟は存在しないということで、現在はその後の研究で2棟に訂正されました。

中央の広場に当たるようなところには2棟が建て替えられて、その後4棟分が出てきたわけです。地面に穴掘って直接埋めますから、根から腐ってくるから、建て替えるわけです。これがどういうその用途にあったかっていうことがなかなか難しい。

一つ考えられるのが、ここに集落村全体の共有の穀物、お米を貯蔵した倉庫。床が高いということは風通しが良くて、倉庫にふさわしい建物構造です。あるいは、神殿、あるいは祭殿。お祭りの建物ではなかったかと。2棟のうちの1棟がそういう違いがあったとか考えられますけれども、確定的なことは言えません。

図を見ると、竪穴式住居がたくさん出てきている。重なっているところが随分あります。同時に存在したとしては30軒あまりの竪穴式住居からなる集落ではなかったかと考えられる。

4棟の建物の跡の左上のところに、大きい建物が表現された。一つだけ、ひときわ大きい建物、床の高い立派な建物。これはおそらく、一般の集落の人ではなくてこの集落の一つにあたる村長（むらおさ）、村長さんのような方の住まいではなかったかと推定しています。

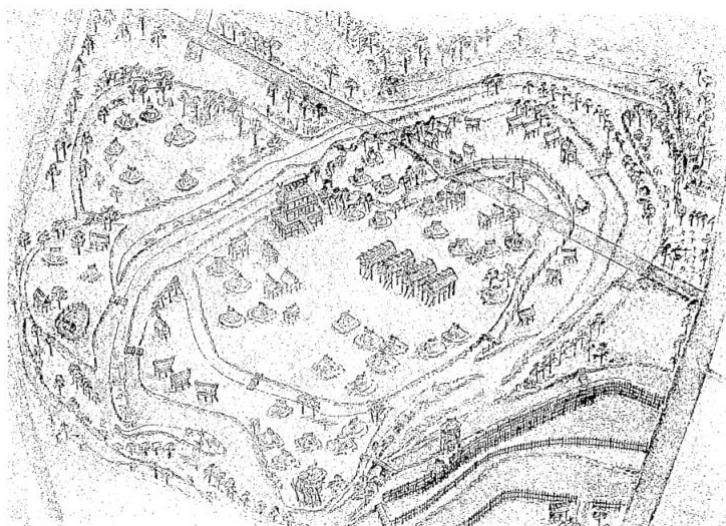


図2 平塚川添遺跡想像復元図
(平塚川添遺跡を愛するみんなの会、1995『前掲書』より)

こういう集落が点々と、あの周辺にあって、そういう村々が集まって、より大きな集団を作って。そして共同作業をする。そういうことがあったのではないかと推定するわけです。

より大きな集団というのを具体的にイメージしてもらうために、図を掲載しています。北部九州における邪馬台国時代の国々と書きま

した。この国々というのは魏志倭人伝に出てくる国々となるわけですが、すけども。

その地図では、壱岐に一支国、対馬国、唐津平野のあたりに末盧国、伊都国、奴国。こういった形で国々があったのではないかと想定しているわけです。皆が納得しているのはこの奴国までです。それから先から邪馬台国に至るまで未解決です。

全くそういう中であってこの北部九州だけをとっても、白抜きで輪郭を示したところがありますけれども、こういった形で国々があったのではと考えられます。邪馬台国時代の国というのは、古墳時代には県（あがた）になり、奈良時代になると郡（ぐん）になります。これがずっと、1300年前から現代まで続いている。この郡というコミュニティですね。人々が生活していく上での適性規模であったということです。

白鳳時代に、持統天皇三年 西暦 689 年に筑後の国と筑前の国ができる。そのころは、筑後の国に全部で 10 あります。郡は 1 つか、2 つ、あるいは場合によっては 3 つあってもいいけれども、そういう、領土、領域が当時の国の規模だにご理解いただければと思います。ここに有明海に面してずっと白抜きの印をしていますけども（図 3）、これは全部、大和郡時代の国々だと私は理解しています。魏志倭人伝をみますと、30 国があったと書いています。

しかし魏志倭人伝には日本列島に国が 30 あったとは書いてない。100 余国のうちいくつかの国と外交関係を結んだかは書いてない。北部九州だけに国があったかということ、決してそういうわけではなくて。中九州、南九州にも、もちろん日本列島の少なくとも西日本一帯には次々と国が誕生していったと考えるわけです。私が、大雑把な話ですけども、邪馬台国の時代には日本列島には 200 から 300 ぐらい国があったのではないかと考えています。

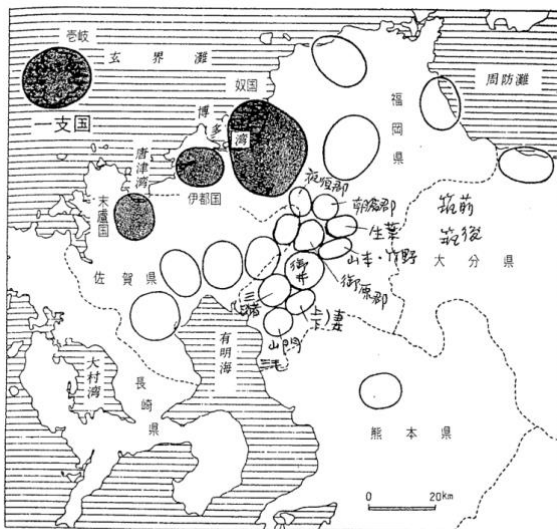



図3 北部九州における邪馬台国時代の国々
(小郡市史編集委員会、1996『小郡市史』第1巻より)

3 前方後円墳の築造とヤマト王権

弥生時代の国が誕生した時に国の王にあたる人が亡くなると一般住民とかけ離れたお墓を築きます。3世紀の中頃になると、全国各地に国があった、その国が県（あがた）になり、大和政権の一地方として編入されていく。地方豪族も古墳を築いていくということになるわけです。

筑後川流域でも初期の古墳が築かれ始めます。それを筑後川流域で見ますと  4 がありますけれども、「筑紫平野の出現期古墳」です。一番東の6番にあたるのは、ここうきは市の田島南遺跡です。4が外之隈古墳、5が生葉1号墳。3が平塚大願寺方形周溝墓で、ここから三角縁神獣鏡が発掘されています。卑弥呼の使者が魏の皇帝からいただいた「銅鏡百枚」はどれにあたるかは議論になったけども。三角縁神獣鏡は最も有力で、ヤマト王権が服属の意味で三種の神器を分け与えた鏡はその1つとの解釈もある。

5世紀に入ると、ヤマト王権との関わりの中で、前方後円墳の分布が次第に広がっていきます。

「日本書紀」には景行天皇がヤマトから来られて九州各地を巡幸されるという様子が書かれています。これをみると筑後川流域には景行天皇が巡幸される地名と符合するかのよう前方後円墳が築かれていることがうかがえます。大牟田の栗崎、高田、車塚、八女、藤山、うきは市的邑（むら）などです。ヤマト王権の支配下に入る過程で前方後円墳が築かれ、そこに景行天皇が行幸してこられたとも考えられる。要するに日本書紀の記述と、工学的な遺跡の状況が符号するような形で見られるということですね。筑後川流域の国々もヤマト政権の支配下に入った結果として前方後円墳等がみられるのではないか。その結果として古墳が築かれていく、そういう政治状況にあったのではないか。

それから古墳時代は 3 世紀の中頃から始まって、7 世紀の中頃まで 400 年間ぐらい続きますが、時代によって変遷します。そうしたなか筑紫平野はですね、全国的にあるいは朝鮮半島も含めて、古代史上大きな話題が八女市の岩戸山古墳です。岩戸山古墳は全長が 138 メートルもある九州で 2 番目。1 番目は宮崎県の西都原古墳の中の女狭穂塚古墳。これが 177 メートルです。女狭穂塚古墳は時代が 5 世紀、古墳時代の中期です。岩戸山古墳は継体天皇の時代ですから、520 年代 6 世紀の前半です。大きさだけ言うと確かに 2 番目に大きいけれども、6 世紀の前半では九州最大です。これだけの大規模な古墳が築かれるというのは、この地域では六世紀前半の段階に筑紫君磐井に象徴されるような大豪族が生まれていたということを物語っています。

図の一番の田主丸大塚古墳を注目しています。田主丸大塚古墳の発掘調査が近年行われ、周辺調査の結果から、全長が 103 メートルという前方後円墳で、六世紀後半の古墳としては九州最大であることが明らかになったのです。

6 世紀の前半の頃には、日向に最大の古墳があったけれども、6 世紀に入ると筑紫に最大の古墳が築かれる。後半に入ると同じ筑紫でも八女のあたりから浮羽の辺りに中心が移ってくるわけです。

日本書紀にでてくる筑紫君磐井という人物のお墓だろうということは学会でも確定的になっています。奈良時代に編纂された「風土記」の中に磐井のお墓のことは詳しく出てくる。その記録と符合するような形で岩戸山古墳が存在する。磐井はヤマト王権に対して反乱を起こすということがあるわけですね結果的には久留米の北の方で戦闘が行われて殺される。私は 6 世紀の前半に九州最大の前方後円墳を築くような八女の豪族はなっていたと、それが磐井の反乱と鎮圧があって、没落していくわけですね。それに成り代わって浮上したのが浮羽の田主丸大塚古墳に葬られた人物ではないかと考えられるわけです。浮羽郡は、律令時代には生葉と呼ばれていました。これだけの巨大な前方後円墳を築くというのは、八女の筑紫君磐井から生葉の君に九州の覇権者が変わったと考えているということでございます。

4 装飾古墳と生葉の臣

日本に古墳は 20 万基あると言われている。そのうちの 720 余りが装飾古墳ですね。そのうちの 400 基以上が九州に集中している。九州で一番多いのは、熊本県の菊池川流域で 231 基、次に多いのが福岡県の 80 基、3 番目が宮崎県の 60 基となるわけです。全国の国の史跡は 73 基が指定されている。そのうち 1 割にあたる 7 基がうきは市にある。筑後川流域の装飾古墳の題材で特徴的なものの一つは同心円文です。日の岡古墳では大きな石がポンと据えてあってそこに同心円の装飾が壁いっぱい描かれている。鏡という説、太陽という説、的（まと）という説がある。

日本書紀によると景行天皇が 18 年 8 月、的（いくは）に来られ、天皇は食事をなさった。この時、付き人が「うき」を忘れた。うきを忘れたところを、ここを「うきは」と呼んだとの記述も日本書紀には書いてある。もう一つ「日本書紀」の仁徳天皇の条のところを見ます

と、高句麗から鉄の盾と的を献上してきた。そこで朝廷は高麗国の客をもてなすために宴会を開いた。盾人宿禰（たたひとのすくね）が高句麗からおくられた鉄の盾と的を弓で射通したので、そこにいる人は絶賛した。そこで天皇からの戸田宿禰（いくはのとだのすくね）名を与えられたという記事があります。

「的臣」（いくはのおみ）という豪族がいたところ、「的臣」のシンボルマークではなかったかと考える。的が生葉（いくは）になったと考えます。



日の岡古墳横穴式石室奥壁付近の装飾文様
(九州歴史資料館資料より)

5 奈良時代

次にヤマト王権が全国を隅々まで統治を収めていく時代になります。律令国家という、法律によって国を治めていくって時代へと変わっていくわけです。これは、いうまでもなく地方制度だけじゃなくて、税制から土地制度からも中国の法律を日本流に咀嚼して一斉に全国に及ぼす。文字通り完成するわけです。邪馬台国の時代から始まった国家の形成過程が、奈良時代、7世紀の終わりから天武・持統からの時代へと国家として完成していくわけです。このようにして全国が国とその下の郡、その下に里。大規模、中規模、小規模の地域単位として全国各地が治められていくということになる。この時に筑後川流域の筑後地域はどうかって言うと、持統天皇3年西暦1689年に筑紫という国だったのが筑前、筑後と2つに分割される。もともと筑紫というのは北部九州全体が一つの勢力圏だった。その時に、地方政治の中心になる

のが国府ということになるわけです。筑後国府跡 III 期国庁模式図と書いています。大きく3つに変遷している。同じ地域ですけども、横にずれるように移転している。

最後の段階、平安時代の頃の国府の建物の規模配置、それが上の図面ですね。周りをついじ堀と申しますけども、土堀のような堀で囲って南に当然門があって、一辺が130メートルくらい。

それでここで筑後国の地方政治が行われるということです。この周辺に関連施設が、ここの長官から官僚から、そういったいろんな役所がございまして周辺に広がっていたわけです。

国庁というのは、年に何回か重要な行事が行われるところですね。年に何回かの重要な儀式が行われるところですね。

全国の何箇所かの国府と比較するとですね。太宰府政庁跡と規模が非常に近いということです。これだけ見てもいかに地方国府が重要な位置にあったかがわかります。他の地方の国府と比較しても、非常に大きい。

筑後という国は古墳時代においても非常に有力な大豪族がいたということが想定されますので、そういう時代の後の機関であり、設備ですので、そういうことが関係しているのではないかと考えるわけです。国府の規模の大きさに発展していくのではないかとこのように考えております。

役所の跡はですね、今申したように比較的解明が進んでいるとこのように言ってもいいかと思えます。

今日は、原始古代のお話をいたしましたけれど、原始というのは、旧石器も縄文、弥生、古墳時代の中頃あたりで、古墳時代の中ごろから平安時代までを古代と読んでいるわけです。原始古代あたりの筑後川流域の話をいたしましたけれども、流域の歴史は今後も続いていくわけでそういう歴史を振り返って、今の筑後川流域をどう理解し、どう新しい時代の筑後川流域を建設していくかっていうことが、歴史を通じてヒントがあるのではないかと思います。